

さんむのふるさと散歩

NO.38

山武林業について

今回のふるさと散歩は、山武杉と山武林業について見てみましょう。私達が普段よく目にする市内の森は、その多くが植林された杉の林からなっています。

そのため杉の林を見ると、よほど山武の気候・風土が杉に適しているのかなと思ってしまうですが、調べてみると、山武の気候・風土は杉の生育にはそれほど最適とは言えないようです。

杉の生育には、年間二千mm以上の降水量と保水能力の良い土壌を必要とします。山武以外の名の知れた杉の名産地は、この条件を満たしているのです。

では山武市はというと、年間降水量が千五百mmと少なく、土質は粒子が細かく水はけが良い火山灰土からなる関東ローム層と、砂質層であるため杉の育成には不適なのです。

ではなぜ、あまりよくない条件のもと、杉が植えられて、今日の山武林業へと発展していったのでしょうか。その糸口をたどるため、市内に現存する市内最古・最大といわれる賀茂神社の大杉を訪ねてみました。



この大杉は、DNA分析の結果、山武杉と分離できないほどの近縁種であることが判りました。現在の山武杉のご先祖に限りなく近いということでしょうか。このように神社や寺の境内に多く



mで、樹齢五百年といわれています。

大杉は、

山武地区森の賀茂神社の境内にあります。山武市の天然記念物にも指定されており、木の高さは35m、太さ6・35

植えられる一方、住宅の背後に杉などを植えて風雨よけとする背戸山と呼ばれる風景が市内各地にみられました。山武市五木田(旧南郷村)出身の童謡歌人・斉藤信夫の『里の秋』の歌詞の中にも「お背戸」のフレーズが出てきます。

江戸時代の初め頃までは、杉は今述べたように神社や家の裏山などのごく限られた範囲に植えられていました。

そして江戸時代の中頃になると、田畑に撒く肥料として干鰯(あぶらをしぼったイワシを乾かして作った肥料)の需要が増えたために、九十九里浜で鰯漁が盛んになりました。鰯漁に使用する船材として、杉の需要が高まったのです。

また、度重なる大火に焼かれ、その復興のため多量の江戸向けの木材・建具(当地域の建具は上総戸と呼ばれました)類を供給するために、台地上へと杉の植林範囲は広がられていったのです。

植林範囲が広がるにつれて、乾燥しやすい土質など、杉の生育に悪い状況を克服して効率よく植林を進める手段が必要となりました。そのために考案されたのが、

- ① マツ・スギの二段造林、
- ② 「サンブスギ」と呼ばれる挿し木造林、
- ③ 造林と前後してソバ・ヒエ・アワを植える木場作と呼ばれる混農林

法が編み出され山武林業が確立したのです。

①のマツ・スギの二段造林とは、乾燥に強いマツを保護樹として先に植え、スギの育つ環境をつくるというもので、マツが土中の湿度を適切に保つと共に冬季の凍結防止や、夏の日差しからも保護します。そして松が生長したら、佐倉炭(燃料用の薪炭材【中継基地の佐倉の地名を冠したブランド名】)として江戸方面へ出荷されました。

②「サンブスギ」と呼ばれる挿し木造林は、品質の良いスギから枝を取って、畑に植えて育てる方法です。スギの枝を植える前に①で話したマツを先に植えてマツがある程度成長してからスギを植林する二段造林とします。

③造林と前後してソバ・ヒエ・アワを植える木場作は、開墾地に植林を始めて数年間はそれらの作物をマツやスギの畔の間に植えるものです。作物がスギを守りつつ育った畑作物も収穫できるというわけです。

①から③でみてきた山武林業を普及・発展させたのは、埴谷村(現山武市埴谷)の林業家藤真一郎・直治郎の兄弟です。

(続きは次号で紹介します)

問 歴史民俗資料館

☎(82)2842